東京大学
文書館ニュース

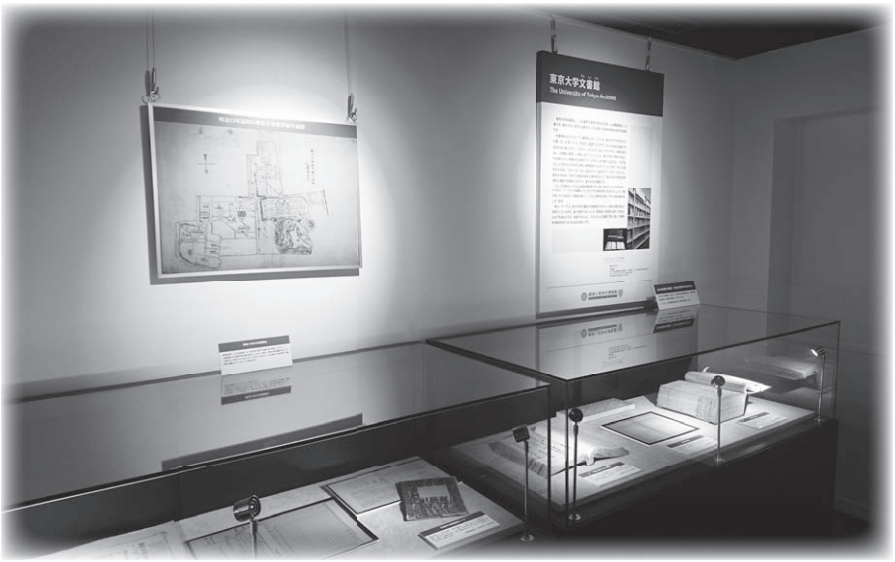
The University of Tokyo Archives Newsletter

vol. 63, Sep. 2019

◆展示のご案内 ― 健康と医学の博物館◆

医学部・医学部附属病院「健康と医学の博物館」のリニューアルに伴い、展示室に常設の文書館コーナーが設置されました。10月からは、当館所蔵資料より、西洋医学の導入に大きな役割を果たした外国人教師の活動を中心に紹介します。

期間：2019年10月3日～2020年3月末（予定）※水曜休館



東大史の小窓の小窓　博物館のある「コの字型」の医学部附属病院南研究棟…

現在の南研究棟は、1925(大正14)年6月に竣工しました。設計は、岸田日出刀(1899～1966)です。岸田は、“内田ゴシック”として知られる本学第14代総長内田祥三の門弟で、内田とともに、安田講堂や総合図書館の意匠にかかわった人物です。

（右図：本郷キャンパス図面 1927(昭和2)年より）
当館HP「東大史の小窓」も随時更新中！

お知らせ

東京大学文書館は、本年4月、独立組織になりました。

Contents

2　ご挨拶　佐藤　健二
2　東京大学文書館の改組の経緯　大沢　真理
4　元総長インタビュー事業の概要　秋山　淳子
4　年史事業における総長インタビューの意義　佐藤　慎一
6　資料の公開について
7　業務日誌（抄）（2019年2月～2019年7月）
8　文書館トピックス　柏図書館企画展示「記録で読みとく『東大紛争』」開催　秋山　淳子

柏キャンパス一般公開

～ご来場お待ちしております～
今年は安田講堂事件から半世紀。昨年に引き続き、当時の記録を紹介します。

日程：2019年10月25日-26日
場所：東京大学柏キャンパス

東京大学文書館
The University of Tokyo Archives

ご挨拶

東京大学文書館長　佐藤　健二

2019年4月に、前任の大沢真理先生からバトンを引き継ぎ、文書館長を務めることになりました。大学執行役・副学長としては、本年度から「室」として整備された150年史編纂室長もあわせて拝命していますので、双方の事業をそれぞれの役割を明確にしながら、発展させていくことが求められているのだと思います。文書館は、大沢先生の努力により、組織的な位置づけの基礎がようやく固まったところですが、まだまだ予算的にも人員的にも充分な状態ではありません。佐藤愼一・羽田正・大沢真理の歴代館長が追い求めた理想を、少しでも実現するよう、力を尽くしたいと思います。学内外からの力強いご支援を、心よりお願いする次第です。

東京大学の公文書館としての本館の業務と課題については、佐藤愼一先生が本ニュースの第53号に書かれたとおりですので、私はもうすこし私的で身近な思いを述べて、ごあいさつの代わりにしたいと思います。

文書館の前身は、ご存知のように、1987年に設置された東京大学史史料室でした。1977年の東京大学創立100周年を記念して『東京大学百年史』が編纂されますが、その過程で収集された、数多くの貴重な史料を整理し、公開し、共通の財産とするために設置されました。

設立されてからだいぶあとになりますが、2003年の前後に、なんどか史料室にお邪魔したことを、なつかしく思い出します。はじめて訪ねたときは、安田講堂内の塔のうえの5階、たいへんわかりにくいと同時に、どことなく秘境めいた狭い階段の果てにありました。エロール・ル・カインの幻想的な絵本『眠り姫』の階段を登るような気分で訪ねたのを覚えています。ちょうど文学部の社会学研究室が、開室100周年をむかえて、記念の本を編集するにあたり、いろいろな資料を調べる必要に急かされてでした。

そのときは、たしか文学部の学生団体である学友会が、昭和の初めから学徒出陣の前の年くらいまで発行していた『会報』『会誌』を見にうかがったのではないかと思います。のちに教授となった各分野の先生方が、若き学生としてさまざまな研究室での一年のできごとなどを書いていて、当時の学生生活がよくわかるおもしろい史料でした。

組織の活動を記録している公文書ももちろん重要ですが、人間としての教員や学生たちの人となりを浮かびあがらせる資料も、魅力的です。本館所蔵の資料のなかには、百年史の編纂のなかでは集められたもの、個人蔵だったものも含め、いろいろが収められていると聞いています。

文科系の学部だけではないと思いますが、かつては定年の時に弟子たちが中心になって、祝意を込めて人柄を語り、履歴や業績などをまとめた一冊を発行する記念の文化がありました。今も多少の形を変えつつ続いていて、ときどき退職される先生から戴きます。こうした本は貴重なのですが、少部数の私家版で失われやすい。「饅頭本」と呼びならわされている分野もあります。その先生を追悼してライフヒストリーをまとめ、故人を偲ぶ知己の文章などを本にして、近親やゆかりの人びとに配った冊子のことです。百年史の史料には組織的ではありませんが、ところどころそうした本も混じっていて、たいへん興味深く感じました。百五十年史の企画を資料面で協力していくなかで、そうした史料は貴重な貢献をするだろうと思います。

組織的なしくみの整備も進めていきますが、所蔵する資料のさまざまな魅力もまた、文書館の輝きの内実であろうと考えています。ご所蔵のコレクションや史料の寄贈も含めて、文書館を育成し、活用していただけますことを期待しています。

（さとう　けんじ）

東京大学文書館の改組の経緯

東京大学文書館 前館長　大沢　真理

2019年3月の規則改正

2019年3月19日の教育研究評議会に、東京大学基本組織規則等の一部改正が提案された。おもな改正点は、東京大学文書館の改組に伴うもので、基本組織規則の「第3章全学組織」に「第4節　文書館（第20条の2)」を新設することである。従来の第20条は「第3節　附属図書館」のみを規定していたが、第20条の2を加え、第4節とした。あわせて文書館規則等の制定が提案され、これらの提案は審議のうえ了承された。それに伴い事務組織規則の一部も改正され、文書館担当課長のポストが新設された。

文書館は2014年4月1日に設置され、東京大学にとって重要な法人文書および東京大学の歴史に関する資料等の適正な管理、保存及び利用等をおこなうことにより、大学の教育研究に寄与することを目的とした。これまでの組織的位置づけは、基本組織規則の「第1節　総長室及び大学委員会」において、総長室の組織を定める第13条により、総長室の下に置かれた組織であった。つまり総長室総括委員会が総括する17の機構等の1つだった。それが2019年3月の改正により、同4月1日から文書館は附属図書館に準ずる全学組織となり、担当課長が事務局を統括する部局となったのである。

文書館設置の背景と位置付けの意味

2019年3月の改組の経緯をたどる前に、文書館が設置された背景から振り返っておこう。文書館ホームページの「沿革」の欄に記されているように、文書館の前身にあたる組織は、1987年4月21日に、東京大学百年史編集委員会の解散と同時に設置された「東京大学史史料室」である。1988年7月には、事務局管理文書を同室に移管することが、管理規程に明記された。

その後、2009年7月1日制定の公文書等の管理に関する法律が、2011年4月1日に施行され、国立大学は歴史的に重要な文書を自ら保存管理しない場合、それらを国立公文書

館に移管することが義務づけられた。移管しないためには、自組織の文書を保存する機能をもつ「国立公文書館等」を備える必要があった。そこで2014年4月に東京大学文書館を設置して整備を進め、1年後の2015年4月1日付けで公文書等の管理に関する法律第2条第3項第2号に定める「国立公文書館等」として内閣総理大臣の指定を受け、同時に「歴史資料等保有施設の指定」（公文書等の管理に関する法律施行令第5条第1項第4号）も受けた。

文書館の調べによれば現在、国立公文書館等の指定を受けている国立大学は12校あり、その半数は、公文書等管理法の施行に合わせた2011年4月1日の指定である。2015年4月1日という東京大学文書館の指定日時は、12校中8番目であり、早いほうではない。また、指定を受けた組織の設置時点も、12校中の11番目である。さらに、2018年度までの東京大学での位置づけが、上記のように総長室総括委員会下の機構であったのにたいして、8校の国立大学は文書館を全学的な位置づけで独立して設置していた。

総長室総括委員会下の機構等は、どの部局にも属さない複数部局を横断するような学際的な「研究」をおこなう組織であり、総長室総括委員会がそれらの機構等の設置・改廃を審議し、教員を選考し、評価（機構の継続とその時限の承認）を3年に1度おこなうこととされていた。文書館は全学の文書を保存管理するという部局横断的な任務をもつとはいえ、研究が設置目的ではないことから、総括委員会下の機構等の1つという位置づけは適合的だったとはいえない。また、法律設置・総理大臣指定の組織の継続・非継続を、学内の委員会が審議決定するという仕組みも順当とはいえない。そして、専有面積や人員の面でも、東京大学の歴史や規模に応じた文書資料の量（質はさておき）に照らすだけでも、けっして誇りうる状態にはなかったというのが、実情である。

しかしこうした実情の認識は、総長以下役員（理事・監事）や大学執行役等に十分に共有されていたとはいえない。改組に向けた動きの起点の一つは、2016年度に総長室総括委員会がおこなった「機構長ヒアリング」での委員のコメントである。評価により3年間の延長が認められたが、過半の委員が、設置形態、組織としてのあり方、組織強化について、検討の必要性や工夫の余地などを指摘したのである。

並行して2017年度には、学術推進支援室の研究組織の在り方検討ワーキング・グループが、総長室総括委員会下の機構を含む研究組織の枠組み・機能・役割などを検討し、2018年2月に提言をおこなった。提言にもとづきワーキング・グループ座長から研究組織にたいして、あり方や方向性にかんする意向確認調査への応答が依頼された（2018年度末締切り）。

2018年度の動き

筆者は、館長就任直後から、繰り返し機会を捉えて役員等に文書館の状況の説明を重ねた。文書館の組織的位置づけ・スペース・予算面の窮状ともいいたい現況に触れたところ、次第に、文書館が法律設置・総理大臣指定の組織であること、現在の位置づけが適合的とはいえないことなどが了解されてきたと感じた。

そうしたタイミングで、6月下旬に総長室総括委員会委員長から、文書館の組織的位置づけについて再検討してはどうか、という示唆があった。上記の研究組織の在り方検討ワーキング・グループからの意向確認依頼にかんしては、文書館にたいしては実施しないこととなったのであり、文書館としてその任務・機能にふさわしい組織のあり方を検討することが要請されたといえる。そこで文書館長から事務局（総務部総務チーム、担当副理事）および文書館専任教員にたいして、適切な組織的位置づけを検討するよう要請した。事務局には学術推進支援室ほか関連部署との相談も依頼した。

他方で7月9日には京都大学大学文書館、7月20日には東北大学史料館を訪問し、ヒアリングと視察をさせていただいた。両館とも2000年中に設置され、2011年4月に国立公文書館等の指定を受けた「大先輩」であり、独立の建物を専有している。東京大学文書館の将来構想に大きな示唆を得る機会となり、貴重な時間と情報をくださった両館の方々に感謝申しあげる。

合わせておりふし、文書館の活動状況について役員等に対する情報提供も続けた。例えば、文書館デジタル・アーカイブを8月末日に公開したことを紹介し、その特徴を説明した。すなわち、一般的には専門業者に委託するところ、オープンソース（OMEKA）を使用して独自構築したこと、しかもOMEKA Sの拡張機能を開発し、データとシステムをオープンなライセンスで公開しており、学内他部局のみならず学外組織も利用できることが、その特徴である。また、東大病院から旧第二外科のカルテの保存について相談を受け、それらを保存する場合に生じるスペース・予算などの問題を検討していることを紹介した。このように情報提供を重ねた結果、総長や理事から、個別の課題でなく、文書館のあるべき姿の全体を構想するようにとの示唆を受けた。

文書館の組織的位置づけにかんする案のとりまとめは秋口から本格化し、最終的に固まったのは、2019年2月である。

文書館の位置づけの選択肢は、基本組織規則の条文に即して述べると、実質的に2つだった。すなわち新たな項を、第20条に設けるか、第21条に設けるか、である。結論は冒頭に述べたように前者の「第20条の2」となった。第21条の項は、2から5まで存在し、学内共同教育研究（21条）、国際高等研究所（21条の2）などを規定している。21条の4の「全国共同利用施設」を別とすれば、研究を主務とする組織や施設であり、文書館には適合的でない。また、上記の研究組織のあり方の検討結果として、従来の「全学センター」は2020年度末までの存置となったので、選択肢にはならなかった。

おわりに

以上が改組の経緯である。基本組織規則の改正と並んで制定された文書館規則等では、文書館の目的には、従来の文書資料の管理・保存・利用に加えて、「資料の保存・利活用のための調査研究を行うこと」が規定され、またその運営委員会を、教員の選考に際して「教授会とみなす」こととなった。対応して文書館運営委員会規則では、審議事項として教員の人事に関する事項が設けられた。

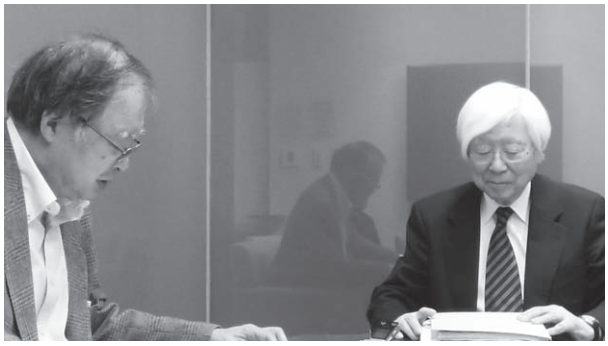
今回の改組により、東京大学文書館は、法律が想定する役割を十全に果たしていくうえで、ふさわしい組織的位置づけを得たといえる。そのうえで、東京大学ならではの発展史を通じて蓄積された資料・データを分析・活用してアーカイブ科学の拠点となり、学術的に大学アーカイブズ総体をリードする役割も期待される。ハード面・ソフト面の整備は今後の課題であり、全学的な理解と協力が欠かせない。12館存在する大学文書館がその機能をいっそう充実させるうえで、現状と課題等の情報を交換できる場も、必要であろう。

（おおさわ　まり）

元総長インタビュー事業の概要

東京大学文書館 特任助教　秋山　淳子

文書館では、2017年度より元総長のインタビューシリーズとして、録画・録音による記録化を開始した。これは東京大学150周年事業で構想されている年史編纂協力を視野に、文書館が進める本学基軸資料の体系的収集の一環として実施しているものである。本学総長に関する所蔵資料は、一部個人資料として活用されているものもあるが、総体としてその役割を検証するには不十分な状況にある。そこで元総長に対するインタビューを実施して、オーラル・ヒストリーによる記録化に取り組んできた。



インタビュー風景 左：佐藤特命教授　右：吉川弘之総長

インタビューの対象は可能な限りの歴代総長とし、第24代の有馬朗人総長（在職：1989-1993）と第25代吉川弘之総長（1993-1997）への聴取を完了した。今年度は続く蓮實重彦総長、佐々木毅総長のインタビューを計画中である。これまでの実施状況の詳細は右表に示したが、基本的に文書館スタッフと東京大学百五十年史編纂準備ワーキング・グループ（以下、150年史WG）メンバー有志の総勢5名程度で会場を訪問、インタビューをおこなう形式をとっている。事前に質問事項を含んだ資料を作成し、聴取に臨んでいるが、当日の総長の語りの流れを重視し、次回内容を柔軟に検討、修正を重ねつつ展開させた。メイン・インタビュアーを佐藤愼一顧問（元文書館長、現在は特命教授）が務め、適宜150年史WGメンバー（2019年4月に東京大学百五十年史編纂室を設置。現在は百五十年史編纂室員）等からも質問をするかたちで、比較的自由な議論となった。そのため、当初は各総長につき5回程度の聴取で計画したシリーズであったが、現状で2倍の10回程度、全21回の実施実績となっている。また

元総長インタビュー実施状況

（1）有馬朗人総長

第1回	2018年	1月23日
第2回		1月26日
第3回		2月 5日
第4回		2月16日
第5回		2月26日
第6回		3月12日
第7回		3月16日
第8回		3月29日
第9回		4月16日
第10回		4月27日

会場：武蔵学園学園長室（第7回のみ文書館顧問室）

（2）吉川弘之総長

第1回	2018年	6月27日
第2回		7月 3日
第3回		7月23日
第4回		10月30日
第5回		11月20日
第6回		11月27日
第7回		12月11日
第8回		12月18日
第9回	2019年	1月22日
第10回		2月19日
第11回		4月23日

会場：科学技術振興機構東京本部会議室

インタビュー時間は、各回通常2時間程度を予定していたが、つねに総長の語りは熱を帯び、参加者の興味も尽きない事態となったため、3時間を越えることもしばしばであった。

その結果として、非常に内容の濃いインタビューシリーズとなり、大きな成果をあげた。記録はビデオ撮影による動画と、音声記録の2種を作成し、さらに150年史WGの協力により、各回の文字起こしを実施中である（今年度以降は百五十年史編纂室で継続）。これらの公開については、時期・方法とも検討中であるが、詳細が決定次第、ニュース等にて周知していく予定である。

（あきやま　じゅんこ）

年史事業における総長インタビューの意義

東京大学特命教授・元文書館長　佐藤　愼一

1．東大総長のリーダーシップ

法人化以前の国立大学学長は、「強過ぎる学部自治と教授会自治の壁に阻まれてリーダーシップを発揮できなかった」としばしば言われる。だが東京大学では、各種官立学校を統合して戦後新設された国立大学と異なり、東京帝国大学の段階から、学部自治や教授会自治と折り合いを付けながら総長主導で大学の管理運営方針を決定する仕組みを、慣行の形で既に作りあげていた。毎週1回開催される学部長会議がそれで、この会議で総長と学部長は熟議をこらして大学の方針を練り上げるのだが、成立が大正年間に遡る学部長会議はあくまで慣行上の存在で、議事録も残していない。歴代の東大総長は、学部長会議の熟議を通して学部長たちを説得し、リー

ダーシップを発揮してきたのである。

大学改革に向けた東大総長のリーダーシップがとりわけ発揮されるようになったのは、教育研究の個性化と高度化、および国際力の強化が大学に強く求められるようになった1990年頃からのことである。有馬朗人総長（総長就任：1989年4月）は大学院重点化と教養学部改革を主導し、吉川弘之総長（総長就任：1993年4月）は柏新キャンパスと大学院新領域創成科学研究科の構想策定を主導した。いずれも現在の東京大学の骨格を作り出した改革プロジェクトである。今回のインタビューを通じて、公文書資料からは決して知ることのできない、大学改革にかけた両総長の思いに触れることができた。その一端を紹介する。

２．有馬総長と教養学部改革

1991年2月、大学審議会は答申で大学設置基準大綱化の方針を打ち出し、大学教育のあり方を画一的に規制していた大学設置基準を大幅に緩和し、カリキュラムを自由に編成して大学の個性を示すことを各大学に求めた。この流れの中で多くの国立大学は一般教養を担当していた教養部を廃止するが、ひとり東京大学は答申の直後にリベラルアーツ教育の重要性を確認し、教養学部を残すという大方針を決めている。同時に有馬総長は、真にリベラルアーツ教育の名に値するカリキュラムの実現を教養学部に求め、改革に向けた教養学部の努力を物心共に支えて、1993年4月から新カリキュラムが導入される。それ以前、大教室で行われる高校授業の延長のような講義に学生はウンザリし、特に東大紛争直後には教養学部を廃止して東大を縦割りに改めるべきだとの意見も学内で有力だった。この抜本的なカリキュラム改革で教養学部は魅力的な学部に生まれ変わり、リベラルアーツ教育は今や東大の看板になったのだから、有馬総長の決断は東大の歴史に極めて大きい意味を持っていたことになる。

有馬朗人総長

インタビューで、ノーベル賞候補にも擬せられた物理学者の有馬総長がなぜリベラルアーツ教育に力を入れたのかを尋ねたところ、有馬総長は即座に自らのふたつの体験を挙げた。ひとつは旧制高校の体験で、1930年生まれの有馬総長は旧制高校を卒業した最後の学年だが、旧制武蔵高校で受けた教育が自分の成長にとっていかにかけがえのないものであったかを、2年連続で受けた哲学の授業を例に、熱っぽく語った。今ひとつは、1970年代にニューヨーク州立大学ストーニーブルック校で1年生相手の講義を担当した体験で、未熟な学生が学力と思考力を身に付けるのを目の当たりに見て、若い学生の成長にリベラルアーツ教育がいかに大切かを痛感したという。有馬総長の決断は、自らの体験を踏まえた、リベラルアーツ教育の重要性に対する信念に基づくものだったのである。

３．吉川総長と東大紛争の体験

1933年生まれの吉川総長は、1968年に東大紛争が起こったとき、30歳代半ばの若い工学部助教授だった。吉川総長はインタビューで、半世紀前の体験を昨日のことのように語ってくれた。

吉川弘之総長

紛争最中の1968年11月1日に大河内総長と全学部長が辞任し、工学部では向坊隆新学部長（のちに東大総長）のもとで教官の総動員体制が敷かれ、紛争で浮かび上がった諸問題（例えば処分問題や学生参加の問題）に対する工学部の方針を検討するために、テーマ別に夥しい数の検討会が組織される。検討会の成果は『工学部討議資料』に掲載されて全教官に提供され、さらにその精髄を集めて『新しい工学部のために』（東京大学出版会、1969年12月）が公刊された。この動きの中心になったのは若い助教授たちで、この本を読むと、大学を支えてきた伝統的権威が音をたてて崩壊する中で、彼らがむしろ学生たちよりも生き生きと未来の工学部について語っているのが分かる。吉川総長はインタビューの中で、助教授たちの間で学科を越えた交流が生まれて真剣な議論が行われ、「百家争鳴」と呼ばれたこの時代の工学部を懐かしく回想している。

この話には後日談がある。助教授たちの学科を超えた交流は、紛争終息と共に下火になるが、やがて1980年代末に東大が改革の時代を迎えたとき、新たな工学部像を求めて再び動き出す。かつての助教授たちは今やそれぞれの学科の担い手となっており、彼らが新たなリーダーとして選んだのが吉川工学部長だった。ディシプリン主義の伝統の強い工学部で新たな工学部像を描く作業は難航を極めたが、その試行錯誤の蓄積が、のちに吉川総長が主導する新領域創成科学研究科構想となって開花することになる。東大紛争の体験は、あたかも地下水脈のようにして、柏キャンパス構想につながっていたのである。

（さとう　しんいち）

資料の公開について
（2019年2月1日～2019年7月31日）

上記期間内に整理を終え、新たに公開した特定歴史公文書等ならびに歴史資料等は、以下のとおりです。

（新規登録資料群＝★）

※概要記述とアイテムリスト（目録）は、当館のデジタル・アーカイブからご確認いただけます（https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/page/home）。

特定歴史公文書等

事務

S0010　開業式・行幸・学位授与
S0020　公民・成人教育関係
S0036 ★ 学生部旧蔵資料
S0049 ★ 厚生課旧蔵資料
S0075 ★ 学生支援課移管資料
S0109 ★ 学生部学生課旧蔵ファイル
S0110 ★ 学生部学生課教養掛撮影写真
S0111 ★ 厚生課学生生活掛資料
S0112 ★ 経理部長業務資料
S0200　内部監査
S0203　キャンパス計画室会議
S0264　部長会・連絡課長会
S0315　キャリアサポート関係イベント開催
S0342　事務長会議
S0347　名誉教授懇談会
S0356　現員簿
S0383 ★ 柏キャンパス一般公開
S0415 ★ 総長室総括委員会
S0416 ★ 科学技術研究調査回答
S0417 ★ 研究活動等状況調査回答
S0419 ★ 学術研究懇談会（RU11）
S0420 ★ 寄付講座・寄付研究部門の設置等報告
S0421 ★ 国立大学法人に係る寄附の実績等に関する調査回答
S0434 ★ 環境安全本部 防火・防災関連会議資料
S0441 ★ 定員削減
S0446 ★ 環境安全本部ホームページ　事故災害報告事例一覧
S0447 ★ 留学生教育センター 運営委員会
S0450 ★ 外国人留学生支援基金運営委員会
S0451 ★ 生協との経費負担申し合わせ
S0452 ★ 女性研究者支援モデルプラン
S0456 ★ 知の共創プラットフォーム
S0458 ★ 長期借入金関係
S0459 ★ 伊藤国際学術研究センター イベント関係

大学院・学部

S0233　教育学部附属中等教育学校　教官会議
S0234　教育学部附属中等教育学校時間割表
S0248　工学系研究科・工学部　予算・決算
S0254　工学系研究科・工学部　情報システム委員会
S0255　工学系研究科・工学部　安全管理
S0259　薬学系研究科・薬学部　教授会・教授総会
S0268　総合文化研究科教育会議
S0272　総合文化研究科・教養学部　委員会
S0279　経済学研究科修士課程入学試験問題集
S0283　医学部運営委員会
S0288　医学系研究科・医学部　教授会
S0302　農学生命科学研究科・農学部　教授会
S0363　医学部教務委員会
S0386　医学教育国際協力研究センター
S0390　8大学工学部長会議
S0409 ★ 農学部・農学生命科学研究科 予算関係報告綴
S0429 ★ 教養学部学友会　（大学事務及び教員評議会関係）
S0430 ★ 総合文化研究科・教養学部　東日本大震災対応
S0431 ★ 駒場祭
S0433 ★ 農学部・農学生命科学研究科 国際交流協定
S0439 ★ 薬学系研究科　授業時間割・授業概要一覧
S0442 ★ 薬学系研究科・薬学部　ヒトを対象とする研究倫理審査委員会
S0443 ★ 数理科学研究科 入試問題
S0444 ★ 薬学系研究科・薬学部　委員会関係
S0445 ★ 教育学部・教育学研究科　学務委員会
S0453 ★ 東大紛争関係写真
S0454 ★ 経済学部　図書委員会
S0460 ★ 国際工学教育推進機構センター長会議
S0461 ★ 情報理工学系研究科　入試委員会
S0462 ★ グローバル30プログラム代表者会議
S0463 ★ 工学部・情報理工学系研究科　大学院関係資料・諸調査

附置研究所

S0378 ★ 医科学研究所倫理審査
S0412　医科学研究所　創立記念シンポジウム
S0413 ★ 先端科学技術研究センター　国際交流協定
S0418 ★ 社会科学研究所　社会調査・データアーカイブ研究センター運営委員会
S0427 ★ 社会科学研究所 所内予算
S0428 ★ 社会科学研究所 客員研究員 客員研修員届書
S0435 ★ 東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター運営委員会
S0436 ★ 東洋文化研究所　研究企画委員会
S0437 ★『東洋文化研究所の50年』編纂資料
S0438 ★ 東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター委員会
S0448 ★ 東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター　共同利用・共同研究拠点事業
S0449 ★ 全国文献・情報センター長会議・セミナー
S0464 ★ 生産技術研究所　教育・学務委員会
S0465 ★ 生産技術研究所　ユーティリティ委員会

附属図書館

S0455 ★ 柏図書館運営委員会
S0466 ★ 附属図書館運営委員会
S0467 ★ 附属図書館　規則　制定・改正関係綴
S0468 ★ 附属図書館　東日本大震災関連資料

全学センター

S0260　情報メディア教育専門委員会
S0414 ★ 低温センター 専門委員会
S0422 ★ 東京大学総合研究博物館小石川分館関係
S0423 ★ 東京大学総合研究博物館規則類
S0424 ★ 学術資料問題連絡会
S0425 ★ 東京大学総合研究博物館運営委員会
S0426 ★ 東京大学総合研究資料館将来計画委員会
S0432 ★ 全国共同利用情報基盤センター　センター長会議・事務（課）長会議
S0440 ★ 浅野地区管理委員会

機構等

S0062　東京帝国大学五十年史編纂関係資料

歴史資料等

教員資料

F0046 ★ 大石嘉一郎関係資料
F0123 ★ 羽田正関係資料
F0228 ★ 最首悟関係資料

学生資料

F0243 ★ 松木脩司関係資料

その他

F0025　史料室アルバム
F0060　学生問題研究所資料
F0242 ★ 昭和25年度新制第一学年入学者選抜要項

上記期間中も個人や団体から多数の資料を寄贈いただきました。ありがとうございます。今後も引き続き、東京大学に関係する資料・学内刊行物のご寄贈をお待ちしています。

業務日誌（抄）
（2019 年 2 月～ 2019 年 7 月）

※（本）: 於本郷本館、（柏）: 於柏分館

2 月 1 日	森本、施設部保全課建築保全チームと小石川植物園温室に関する資料について打合せ（本） 秋山、科学研究費による出張（～ 2 日）（北海道大・札幌市）
2 月 5 日	森本、国立科学博物館「科学者資料デジタルアーカイブの研究開発」に関する打合せ（国立科学博物館）
2 月 6 日	森本、社会連携推進課と震災関係文書に関する打合せ（本）
2 月 12 日	秋山、NHK 政策局開発推進「日本人のおなまえっ！」取材対応（柏）
2 月 13 日	国立近現代建築資料館より貸出資料 1 点返却 森本、宮本、秋山、健康と医学の博物館北出助教と展示打合せ（本）
2 月 19 日	佐藤顧問、秋山、吉川弘之元総長へインタビュー（第 9 回）（JST）
2 月 20 日	広報課より旧東大記者会関係資料 3 箱寄贈
2 月 21 日	第 52 回館員打合せ、書庫内清掃（柏）
2 月 22 日	宮本、デジタルアーカイブの視察（神奈川県立公文書館） 森本、内閣府公文書管理委員会出席
2 月 23 日	秋山、科学研究費による出張（～ 28 日）（オーストラリア）
2 月 25 日	森本、工学・情報理工学図書館貴重書調査（本）
2 月 26 日	収蔵庫防虫のためのエヤローチ散布（本）
2 月 27 日	森本、矢内原家訪問、矢内原忠雄関係資料（追加寄贈分）1 箱受取 森本、国立近現代建築資料館と打合せ（本）
2 月 28 日	矢内原科研へ、デジタル化対象資料 16 点貸出
3 月 1 日	森本、博物館学国際セミナー「博物館アーカイヴスの構築」に参加（明治大学）
3 月 2 日	宮本、IIT ティルパティ校のデジタルアーカイブ計画の視察と討論（～ 10 日）（インド）
3 月 5 日	F0244 小関敏彦関係資料寄贈
3 月 8 日	森本、ヒューマニティーズセンター研究会参加（福武ホール）
3 月 11 日	環境整備チームによる書架清掃（～ 12 日）（柏）
3 月 12 日	森本、宮本、秋山、宇宙線研究所資料保存の打合せ（柏）
3 月 15 日	森本、国立公文書館と打合せ（本） 森本、秋山、糸川英夫資料の資料整理に関する打合せ（生産研） 宮本、デジタルアーカイブ学会参加（京都）
3 月 18 日	森本、内閣府公文書管理委員会出席
3 月 20 日	F0244 小関敏彦関係資料追加受入 第 53 回館員打合せ（本）
3 月 22 日	F0227 土壌圏科学研究室旧蔵資料、55 点追加受入 百五十年史編纂準備 WG、資料調査のため来館（柏）
3 月 25 日	百五十年史編纂準備 WG、資料調査のため来館（柏）
3 月 26 日	森本、三重県公文書等管理条例検討懇話会出席（三重県） 収蔵庫防虫のためのエヤローチ散布（本）
3 月 28 日	森本、附属病院旧第二外科カルテ保存に関する打合せ（本）
3 月 31 日	大沢真理館長、吉見俊哉副館長、佐藤愼一顧問退任 『東京大学史紀要』第 37 号、『東京大学文書館ニュース』62 号刊行
4 月 1 日	文書館改組。全学組織として位置付け（東京大学基本組織規則第 20 条第 2 項） 佐藤健二館長、中嶋康博副館長着任
4 月 15 日	柏図書館企画展示「記録で読みとく『東大紛争』」開始 F0244 小関敏彦関係資料、1 箱追加受入
4 月 18 日	健康と医学の博物館内、文書館専用展示開始（附属病院南研究棟）
4 月 19 日	収蔵庫防虫のためのエヤローチ散布（本） 宮本、日仏歴史学シンポジウム「世界で考える日本史」参加・研究発表（～ 20 日）（日仏会館）
4 月 22 日	第 54 回館員打合せ（柏） 環境整備 T による書架清掃（～ 23 日）（柏）
4 月 23 日	佐藤特命教授、秋山、吉川弘之元総長へインタビュー（第 10 回）（JST）
4 月 24 日	宮本、情報学環「デジタルアーカイブ原論」講義
4 月 26 日	簡易殺虫措置（S0018）、乾燥剤交換交換（F0121）
5 月 10 日	F0221 旧職員寄贈資料 1、追加受入 宮本、柏キャンパス一般公開担当者会議出席（物性研） 森本、国立科学博物館「科学者資料デジタルアーカイブの研究開発」に関する打合せ（柏） 佐藤館長、森本、予算ヒアリング出席（本）
5 月 20 日	健康と医学の博物館より、佐藤三吉関係映像（原盤胆肝膵外科所蔵）のデジタルコピー受贈
5 月 21 日	森本、埼玉県立文書館 50 周年＆リニューアル記念シンポジウムパネルディスカッション「“ふみくら”を開く－時代をつなぐ記録資料の世界－」パネリスト（埼玉会館） 収蔵庫防虫のためのエヤローチ散布（本） 収蔵庫（SC105）一時的に空調 24 時間稼働開始（本）
5 月 23 日	F0221 旧職員寄贈資料 1、追加受入 収蔵庫（SC105）空調停止（本）
5 月 24 日	資料保存器材へ修復及びデジタル化対象資料を委託（柏） 収蔵庫（671 以外）空調 24 時間稼働開始（柏）
5 月 25 日	森本、宮本、秋山、記録管理学会出席（～ 26 日）（柏）
5 月 27 日	森本、三重県公文書等管理条例検討懇話会出席（三重県）
5 月 28 日	第 55 回館員打合せ（本）
5 月 29 日	F0221 旧職員寄贈資料 1、追加受入
6 月 3 日	収蔵庫（SC105）空調 24 時間稼働開始（本） 環境整備チームと除湿機排水作業について打合せ、収蔵庫（659 以外）除湿機稼働開始（柏）
6 月 6 日	森本、秋山、「国際アーカイブズ週間」記念講演会参加（ベルサール九段）
6 月 7 日	森本、宮本、秋山、全国公文書館長会議出席（ベルサール九段） 森本、秋山、経済学部教授会記録確認（本） 収蔵庫（S110）24 時間空調稼働開始（本）
6 月 11 日	東京大学山の会より資料寄贈（F0254 および刊行物）
6 月 18 日	森本、宮本、秋山、資料のアーカイブ化について宇宙線研究所と打合せ（柏）
6 月 19 日	宮本、部局情報セキュリティ責任者連絡協議会代理出席（情報基盤センター） 資料移送（本郷→柏） 総務部紺野特任専門員他 1 名、紛争資料調査のため来館（柏） 星野、渡辺洪基肖像画の保存修復に関して東京藝術大学保存修復油画研究室を訪問
6 月 20 日	東京大学乗鞍寮 VSA の会より刊行物 3 冊寄贈
6 月 24 日	森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席（本）
6 月 25 日	森本、第 1 回近現代建築アーカイブズ講習会出講（国立近現代建築資料館）
6 月 26 日	森本、部局 CERT 会議出席 宮本、秋山、小根山、星野、村上、修復現場見学（資料保存器材） 第 56 回館員打合せ（本）
6 月 27 日	令和元年度 第 1 回文書館運営委員会（大講堂）
6 月 28 日	収蔵庫防虫のためのエヤローチ散布（本） 秋山、森本、科学研究費による出張（筑波大学アーカイブズ） 宮本、Japanese Studies Association of Australia の研究大会への参加・研究発表（～ 7 月 6 日）（オーストラリア）
7 月 1 日	逢坂裕紀子特任研究員着任
7 月 5 日	森本、非常勤出講（学習院大学）
7 月 11 日	森本、ハラスメント予防担当者連絡会議出席（本）
7 月 12 日	宮本、柏キャンパス一般公開担当者会議（柏）
7 月 17 日	コンバット取替（本・柏）
7 月 19 日	秋山、科学研究費による出張（神戸大学大学文書史料室）
7 月 23 日	森本、アーカイブズ・カレッジに出講（国文研）
7 月 26 日	秋山、柏図書館企画展示「記録で読みとく『東大紛争』」ギャラリートーク
7 月 29 日	森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席（本） 収蔵庫防虫のためのエヤローチ散布（本）
7 月 30 日	第 57 回館員打合せ（柏）

文　書　館　ト　ピ　ッ　ク　ス

柏図書館企画展示「記録で読みとく『東大紛争』」開催

昨年度の柏キャンパス一般公開で好評をいただいた展示「記録で読みとく『東大紛争』」ですが、今年度は会場を柏図書館にうつし、上半期の第13回企画展としてリニューアル開催となりました（会期：4/15～9/10）。昨年より規模を拡大し、文書館所蔵資料から「東大紛争」の実態にせまる企画です（写真1）。

写真1

柏図書館1Ｆの展示スペースは、明るく、入口にも近く、だれでも気軽に立ち寄れるエリアにあるため、通路に面して案内パネルを設置したところ、多くの一般市民を含む来館者の関心を惹いたようです。

展示の構成は、大学側で作成した詳細な記録を紹介するとともに、内部での大学改革への議論をとりあげ、大学が「東大紛争」をどのように捉え、そこから何を考えたのか、という問いへのアプローチを試みました。

注目点は、次の二つの初展示資料です。一つは、1970年6月に加藤総長代行以下の執行部が、当時の状況を検証した座談会を開催、録音記録を作成しています。そのテープ起こし原稿から、入試実施をめぐる文部省との最終交渉部分を紹介しました。もう一つは、工学部の「討議資料」です。多くの教員が「紛争」解決と学内改革への論考を寄せた資料集ですが、後の総長となる向坊隆学部長による痛烈な現状批判は象徴的です。こうした各学部内での学内改革議論は、従来ほとんど注目されなかった視点です。

写真2

このほか、当館『紀要』でも翻刻を進めている「紛争日誌」や、保健センターの負傷者治療記録といった詳細な内部資料、キャプションつきの職員作成写真アルバムの拡大写真パネルからは生々しい構内状況がうかがえ、目を奪われる来館者の姿が目立ちました。そして、こうした記録を直接閲覧できる文書館の機能について解説するパネルも設置し、周知・普及にも努めました。

写真3

さらに今回は、7月26日に展示解説を目的としたギャラリートークを開催しました（写真2・3）。参加者は当時を知る世代から若い外国人留学生まで多様でしたが、高い問題関心を共有した“熱い”空気感となりました。とくに1969年1月の秩父宮ラグビー場での「七学部学生集会」の音声記録を、速記録とともに確認しましたが、その臨場感に興奮された様子でした。解説に続く質問タイムでも多くの声があがり、その後、一部の方はそのまま文書館ツアーへ。大変充実した時間となりました。

今年度より柏図書館での企画展開催は定例化する予定です。ギャラリートークもふくめ、今後の展開にご期待下さい。

（秋山　淳子）

東京大学文書館ニュース　第63号　ISSN 0915-3284

発行日：2019年9月30日（年2回発行）
編集・発行：東京大学文書館
〒113-8654　東京都文京区本郷7－3－1
電話：03（5841）2077（直）
https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/index.html

印刷所：松枝印刷株式会社